



1971-1977

あらっ、もう高3。
もうちょっとやりたかったのに。



エッフェル塔の前に

好素材揃うも、
足なみが今一揃わず。

代表選考会にこそ参加しなかったが、エースの井関（頭も良く女にももてたが今はただのオッサン）やサイドバックの長身河原（鬼のような顔をしながら女には晩生で、結婚が遅れた）などは確実に当時の兵庫県を代表する選手であった。加えて、冷静沈着なキャプテン山村（冷静沈着というよりは単に老けていた）やチーム一のファイター吉村（子供のような性格のまま子供ができた）なども同じレベルの優秀な選手であった。

しかし、練習ぎらいの横着者西村（今は改心してこの本の編集を手伝っている）やお調子者の佐々木（今もキタ新地では絶好調）など足なみを乱すものや故障者に泣き、あまり誇れる戦績を残せてはいない。

全国大会出場、近畿大会優勝、と黄金時代の後であっただけに佃先生ももう投げていると思われる34期ではあったが、神戸市で優勝したことがあった。35期4名の力は借りたものの、何となくみんなの足なみが揃い連戦連勝をした。決勝では骨折した大黒柱河原に代わって出場した吉野（彼も問題児であったが今は普通のまじめな人になってしまった）のがんばりや、ストッパー

亀井の捨て身のディフェンスで優勝をものにした。

このように我々8名の34期メンバーはたった一度だが優勝の美酒を味わうことができた。あっ、ひとり大切な人を忘れていた。身長183センチのエースストライカー宮本だ。

彼の開発した秘技“ヒザトラ”は、膝でトラップする時、パスなのかシュートなのか、空振りなのかの判断がつかず、敵も味方も完全に翻弄されたものだった。

[西村 達衛]



今はなき“淀万”のあの事件。

“びっくりうどん3杯食べるとただ。”
こんなこと言われると部練帰りの空腹時にはついつられますよね。

当時、六甲道の交差点に淀万といううどん屋があり、その日も我々は誘蛾灯に引き寄せられる虫のようにうどん屋へ走ってしまいました。

翌日は、神戸高校との大切な一戦だったのですが試合前に先生から、「おまえら昨日うどん屋行ったやろ。負けたらグラウンド400周せい。(なんで知ってんの)」とお言葉。結果は見事に惨敗。試合後先生は、「昨日うどん屋にいった奴は、全員丸刈りや」とのこと。やっと生えそろう髪を泣く泣く丸ボウズにしました。当時は「グラウンド400周の根拠はどこにあるんですか」とか「うどんを食べたから試合に負けたんじゃないと思います」などと反論できる者もなく、この理不尽で非科学のお言葉にも素直に従う、純情な我々だったのです。

ちゃっかりドイツ遠征。

今はなきヒルケルさんのお名前を頂き昭和50年に創設されたOBの社会人チーム『六甲ヒルケルクラブ』。当時はまさに敵なしの大進撃で、関西リーグにも進出しようかという勢い。勢い余った若き佃先生はじめOBは、無謀にも海外遠征をやってしまうのです。

ちょうど卒業したばかりの我々34期は大半がこの遠征にちゃっかり参加。サッカーを指導する立場の先生には、親善試合2試合を含む、ケルン体育大学の施設見学、ドイツ代表チームの合同練習に参加、オランダでのプロゲーム観戦などおおいなる収穫を上げた遠征でしたが、我々34期の面々はもちろん、ほとんど観光気分。

行く先々でトラブルの連続。佃先生の怒りと疲労はピークに達し、これ以降二度と海外遠征が実施されることはなくなりました。後輩諸君ゴメン。でも俺達はほんとに楽しかった。ラッキー。

くたびれかけたおじさんよう一度。

「しょうもない相手に負けてしもたな」「トレーニングを強化して次の大会はがんばろな」などと言っているうちに、我々もあつという間に高3になってしまっていた。

卒業して早17年が経とうとする我々34期ですが、最近になってもう一度あのグラウンドでボールを追いかけていたいという気持ちが日増しに強くなっていくのは、筆者のわたしだけではないはずです。

「あの試合で、あのパスが通ってれば…」

「もう一歩足を伸ばしていれば…」という思いが頭を駆けめぐり、あげくの果てには「じゃあ、もう一度あのメンバーで集まって、やり残したプレーをやってみようか」という気分になってしまうのです。そんな気分させてくれる六甲サッカー部と佃先生と我々の麻雀仲間市川先生に感謝するとともに醜い姿をさらしながらもう一度あのグラウンドを目指す34期生でした。